

◀ 書評 ▶

H. ハルダー：ドゥ・ブロッソ議長と
18世紀のイタリア旅行

E. および R. シュヴァリエ：イタリア旅行
古代イタリアを発見したフランス旅行者達

Hermann Harder: *Le président de Brosses et le voyage en Italie au dix-huitième siècle*. Slatkine, Genève, 1981, 508 p.
Elisabeth et Raymond Chevalier: *Iter Italicum. Les voyageurs français à la découverte de l'Italie ancienne*. Les Belles Lettres, Paris, Slatkine, Genève, 1984, 478 p.

竹 内 啓 一

イタリアという土地は、中世の巡礼にはじまって、やがてそれが文化的巡礼あるいは修学旅行の対象として⁽¹⁾、アルプスの北の国々の人達によって、何百年にもわたって訪ずれられてきた。彼らは、多くの記録を残してきたし、また、彼らのためのガイドブックもいくつか出版されたし、また、何人かの旅行者のイタリア旅行記は、ガイドブックとしても利用されてきた。

16世紀以降、イギリスの上流社会の子弟のイニシエーションとして定着してきたいわゆるグラン・トゥアーについては、すでに多くの多面的な研究がなされてきた。グラン・トゥアーの内容そのものの復元、彼らの旅行記の記述と当時のイタリアの状態との対比考証、あるいは、旅行記そのものの史料としての利用から、さらに、最近では、旅行者の目に、当時のイタリアがどのようにうつっていたか、そのようなイタリアのイメージそのものと、その変遷とが研究の対象としてとりあげられるようになってきた。イギリス人とアメリカ人の旅行記については、R. S. Pine-Coffinによる詳細な書誌学的研究が1974年に発表されている

(1) 巡礼は、勿論宗教的動機による旅行であるが、日常生活の世界からの脱却、そして、それを経験すること自体が、いわばイニシエーションとして社会的意味をもっている点では、トゥアーあるいは修学旅行と厳密に区別することはできない。

し⁽²⁾、エイナウディの『イタリア史』では、このような外国人によって見られたイタリア像にいくつかの章があげられている⁽³⁾。

フランス人およびドイツ人のイタリア旅行に関しては、たとえばゲーテやスタンダールの場合のように、個別の文学者や思想家のイタリア旅行が考究されることはあったが、イギリス人旅行者に関してのような体系的な研究がなされるようになったのは比較的最近のことである。北イタリアのモンカリエにイタリア旅行に関する研究センター(Centro Interuniversitario di Ricerche sul "Viaggio in Italia")が設立され、1980年から、研究書、文献目録および旅行記録の復刻版の三つに分けて、活潑な出版活動をしていることも研究の進展に大きく貢献している。

ここでとりあげる二冊の書物も、この研究センターが出版する『イタリア旅行文庫』(*Biblioteca del Viaggio in Italia, Bibliothèque du Voyage en Italie*)の研究叢書として出版されたものである。Harderの研究は、もともと*Die französischen Italienreiseberichte des Ancien Régime und die «Lettres Familières sur l'Italie» des Président de Brosses*の題名で博士論文としてベルリン自由大学に提出されたものであり、今回の仏訳に際しては、1973年以降なされた研究も参考にされ、巻末の文献目録にもつけ加えられている。他方、両Chevalierの書物は、おなじ『イタリア旅行文庫』の一冊をなすと同時に、Les Belles Lettresの『ローマ世界』(*Le monde romain*)叢書の一冊をもなしている。

De Setaも指摘するように⁽⁴⁾、1700年代を通じて、外国人旅行者のイタリアに関するイメージに大きな変化が生じた。この変化は多面的で、ひとつの文化史上の転換としては把握しきれない複雑な性格をもっているし、どこまで一般化できるかという点で問題があるが、イギリス人旅行者、フランス人旅行者、ドイツ人旅行者のあいだでも、この1700年代におけるイタリア・イメージの変化に相違がある。イギリス人の場合、1700年代の初頭に、古典古代に対する憧憬をはっきりとうたい、当時のイタリア社会のデカダンス状態を痛烈に批判したJ. Addison⁽⁵⁾、Palladioの賛美者であり、ヴィクトリア時代のRuskin的ロマン主義の先駆をなしたR. B. Burlington⁽⁶⁾、そしてイタリアの土地をユートピア化したG. Berkeley⁽⁷⁾

(2) R.S. Pine-Coffin: *Bibliography of British and American Travel in Italy to 1860*, Leo S. Olschki, Firenze, 1974, 371 p.

(3) J. Le Goff: *L'Italia fuori d'Italia, L'Italia nello specchio del Medioevo. Storia d'Italia*, vol. II, Einaudi, Torino, 1974, pp. 1935-2088. F. Braudel: *L'Italia fuori d'Italia. Duè secoli e tre Italie. Storia d'Italia*, vol. II, Einaudi, Torino, 1974, pp. 2091-2248. F. Venturi: *L'Italia fuori d'Italia. Storia d'Italia* vol. III. Einaudi, Torino, 1973, pp. 987-1481. C. De Seta: *L'Italia nello specchio del "Grand Tour" Storia d'Italia, Annali 5 Il Paesaggio*, Einaudi, Trino, 1982, pp. 127-263.

(4) C. De Seta, *op. cit.*

(5) J. Addison: *Remarks on Several Parts of Italy*, Jacob Tonson, London, 1705, 534 p.

(6) R. Wittkower: *Palladio and English Palladianism*, London, 1974, pp. 115-132.

(7) G. Berkeley: *Journal in Italy* in A.G. Raser (ed.) *The Works of George Berkeley*, Clarendon, Oxford, 1871, pp. 512-594. 他のイギリス人旅行者達とちがってアイルランドのカトリック教徒であったパークレーがイタリアに滞在したのは、1713年から15年にかけてであった。

の三人に代表される三つの質問が、すでにはっきりとしたかたちをとってあらわれていたのに対して、フランスでは、16世紀までの、文化的先進国イタリアというイメージに対する反動として、迷信と頑迷な旧慣墨守、そして貴族主義の国イタリアというイメージが18世紀を通じて支配的であった。しかし、イギリス人旅行者の場合と同様に、古典古代に対する関心も、18世紀のフランス人旅行者に、確実にうまれつつあったのである。

両Chevalierが、フランス人旅行者のイタリア・イメージの変化として、とくにとりあげるのは、古典古代に対する関心の発生である。たしかにポンペイやエルコラノ(ヘルクラヌム)の発掘が開始され、ペストゥムが外国人旅行者によって訪ずれられるようになったのが1700年代なのである。ヴェネツィア、フィレンツェ、ローマとならんで、ナポリがイタリアの都市として重要な意味をもつようになってきたことは、たとえば17世紀末のF.-M. Missonの旅行記⁽⁸⁾と、18世紀、アンシャン・レジーム期のフランス人旅行者を代表するJ.-J. Lalandeの旅行記⁽⁹⁾とを比較しただけでも明らかである。ナポリをふくめて、南イタリアへの関心が増大したのは、E. Chevalierが見事に分析しているように、王国の首都としてのナポリの、とくに1734年以降の繁栄という事実と、Saint-Non⁽¹⁰⁾に代表されるような、自然の風景、都市の景色に対する新しい審美観が生じてきたことも与かっている。E. Chevalierによる「18世紀のナポリ」と題する第一部では、フランス人旅行者の南部イメージの変化、あるいは、南部に目が移ることによるイタリア・イメージの変化が説得的に示されている。

イタリア北部をとりあげた第2部、ローマを主題にした第3部およびどちらかというと個別の旅行者に焦点をあてた第4部は、R. Chevalierの研究で、各地における古典古代の遺跡を外国人旅行者がどのように記述したかということとを徹底的に検討したものである。フランス人旅行者のものを主にしているが、それに限られてはいない。関連する記述を網羅的に引用しながら、イタリア各地における考古学的発見がどのように進展したか、古代の遺跡や美術品に対する評価がどのように変化したかということとを克明にたどった歴史学的研究である。これだけ体系的かつ網羅的に旅行記を検討すれば、フランス人を中心にした旅行者が、イタリアに古代を発見し、再評価していく過程が説得的に示されることになる。すくなくとも、史料としての旅行記の選択や引用の恣意性という批判は、この研究に対してはあてはまらないであろう。しかし、記録をのこした旅行者がどのような社会的および思想的背景をもっていたかということとの関連での旅行記の吟味はあまりなされていない。R. Chevalierの文章は、大部分が、最近数年間にすでにさまざまな研究集会での報告や雑誌論文として発表され

(8) F. -Max. Misson: *Nouveau Voyage d'Italie, fait en l'année 1688, avec un mémoire contenant des avis utiles à ceux qui voudront faire le mesme voyage*, 1691, Le Haye.

(9) J. -J. de Lalande: *Voyage d'un François en Italie fait dans les années 1765 et 1766*, Venise et Paris, 1769.

(10) C.R. de Saint-Non (Abbé de): *Voyage pittoresque ou description des royaumes de Naples et de Sicile*, Paris, 1781-85.

たものであるが、このようにしてまとめられると、彼が独創的に、新しい研究分野を開拓してきていることがわかる。

Harder の書物は、ドイツ語の原題が示しているように、アンシャン・レジームの時期におけるフランス人旅行者の記録を検討し、そのなかにおける C. de Brosse の旅行記⁽¹¹⁾の位置づけをおこなったものである。Harder は、1700 年代、革命前のフランス人のイタリア旅行を規定して、それに先行する時代の、文化巡礼、そして上流社会の子弟のイニシエーションという性格が継承されてはいたが、イタリアを学ぶ対象としてよりも、そこにおける後進性、衰退と頹廢に注目する視点が強く出てきたとし、このような、フランス人の新しいイタリア・イメージを、フランス啓蒙思想との関連で注目している。このような著者の観点からすれば、Misson はこのような新しいイタリア観の開始を代表し、旅行案内書として書かれた Lalande の書物において、そのような観点がその頂点に達したことになる。たとえば Montesquieu についても、一つの章をあてて、彼のイタリア旅行が『法の精神』の内容に大きな影響を与えていることを結論している。

本書の特色は、何よりも、このようにして旅行記を思想史研究の対象として体系化した点にある。同時にこの研究は、イタリア旅行者の社会学であり、さらに重要な点は、旅行記を文学作品として分析したことである。したがって、通常の文学史ではとりあげられない多くの作品がとりあげられることになる。したがって、Harder にとって、18 世紀フランス人旅行者達が見、そして判断したものが、当時のイタリアの現実をそのまま反映したものではないことは当然なのである。逆説的に言えば、そこに思想があり文学があるからなのである。そして、とりあげられている旅行記も、1691 年の Misson のものから、1788 年の Duparty⁽¹²⁾ のものまで、アンシャン・レジームというフランス社会史の時代区分によって限定されている。

de Brosse の書物は、イタリア社会に対する痛烈な揶揄と批判とによって、19 世紀になって出版され、読まれたのであるが、Harder は、de Brosse の記述に、アンシャン・レジームの旅行者の、ある型にはまった内容からはみでた、異質のものを読みとっている。それは、多分に de Brosse の人柄によるものではあるが、同時に、Chateaubriand に代表されるような、新しいロマン主義の神話によってつくられたイタリア・イメージの先駆をもなしていたのである。de Brosse の記述の内容が、当時のディジョンの、そしてフランスの社会、知的世界との関連で詳細に分析されているが、de Brosse の旅行記のこのような思想史的立場は、Harder が本書ではじめてうちだした見解であろう。

以上見たように、ここでとりあげた二冊の書物は、フランス人によるイタリア旅行記の研

(11) *Lettres Familières* の名のもとに知られている President de Brosse の旅行記は、Harder が詳しく検討しているように、当初出版などを予定しないで友人達に書き送った手紙そのものではないし、最初の版が出版されたのは、彼の死後、そしてイタリア旅行後 60 年経った 1799 年のことであり、現在読まれている形をとって出版されたのは 1836 年のことである。

(12) C.M. J-B Duparty: *Lettres sur l'Italie en 1785*, Rome 1788.

究に新しい地平をひらいたものと言えるであろう。それは、新しい知見をもたらしたというだけでなく、方法論的にも斬新だという意味においてである。同時に、大変刺激的なこの二冊の書物は、われわれ読者に、いくつかの新しい問題意識を喚起させる。外国人旅行者のイタリア・イメージと、リソルジメントの理念がまだうまれていない時代におけるイタリア人（あるいはイタリアという土地の住民）のイタリア・イメージとはどのような関係にあったのであろうか。外国人旅行者とイタリアの上流社会あるいは知識人との交渉という側面の研究も大きな意味をもつはずなのである。同時に、このような、ある土地、ある国についてのイメージの研究は、資料の選択と解釈に恣意性がないか、過度の一般化がないか、という点でたえず自戒しながらなされなければならないことをも、この二つの研究書は、われわれに教えてくれるのである。

《RÉSUMÉ》 RECENSIONE

**LE PRÉSIDENT DE BROSES ET LE VOYAGE EN ITALIE
AU DIX-HUITIÈME SIÈCLE**

By Hermann Harder, Slatkine, Genève, 1981, 608 p.

**ITER ITALICUM. LES VOYAGEURS FRANÇAIS
À LA DÉCOUVERTE DE L'ITALIE ANCIENNE**

By Elisabeth et Raymond Chevalier

Les Belles Lettres, Paris et Slatkine, Genève, 1984, 478 p.

Keiichi TAKEUCHI

L'autore di questa recensione ha intenzione di presentare innanzitutto i recenti interessi accademici sulla storia dei viaggiatori stranieri in Italia. Sui viaggiatori inglesi esistono studi sin dagli anni '50; infatti c'è una bibliografia dettagliata di Pine-Coffin pubblicata nel 1974. Invece sui viaggiatori francesi soltanto recentemente sono iniziati studi sistematici che hanno cambiato idee convenzionali.

Dei due libri qui esaminati, il primo è quello di Harder inizialmente scritto in tedesco come tesi di dottorato presentata nel 1973, e tradotto poi in francese nella collana *Biblioteca del Viaggio in Italia*, curato dal Centro Interuniversitario di Ricerche sul "Viaggio in Italia". Il secondo volume scritto da E. e R. Chevallier direttamente in lingua francese fa parte sia della collana *Biblioteca del Viaggio in Italia* che de *Le monde romain* edita da Les Belles Lettres.

Ambedue i volumi esaminano l'immagine che hanno avuto dell'Italia i

viaggiatori francesi del XVIII secolo. Durante questo secolo l'immagine dell'Italia ha subito una trasformazione che agli occhi degli inglesi era già iniziata nella seconda metà del '600. Questa trasformazione aveva molti aspetti. Gli Chevallier esaminano questa trasformazione in rapporto ai nuovi interessi verso i periodi dell'età classica. Infatti come De Seta ha accennato, fra il libro di Misson pubblicato nel 1691 e quello di Lalande pubblicato nel 1769 esiste una grande differenza soprattutto nella parte dedicata all'Italia Meridionale, dove nel '700 iniziarono gli scavi di Ercolano e Pompei. Gli interessi verso l'Italia Meridionale furono suscitati, come E. Chevallier accenna, non soltanto dalle nuove scoperte archeologiche ma anche dalla nascita di un nuovo apprezzamento estetico verso le bellezze naturali. Nelle parti successive scritte da R. Chevallier dedicate all'Italia settentrionale ed a Roma troviamo una abbondante citazione bibliografica, frutto di accurate ricerche.

Il libro di Harder anche se intitolato "*Il Viaggio in Italia del Président de Brosses*" in effetti esamina gli scritti di molti viaggiatori francesi del '700. Per Harder de Brosses rappresenta sia la vecchia che la nuova immagine dell'Italia. Per vecchia immagine si intende una Italia decadente con aspetti molto criticabili come reazione ad una Italia da studiare del XV e del XVI secolo. Questa vecchia immagine corrisponde anche alla filosofia illuminista, invece la nuova immagine che nasce all'inizio del XIX secolo rappresenta una Italia idealizzata legata all'influenza del romanticismo. Harder studia non soltanto la base filosofica del cambiamento di queste immagini ma sottolinea anche il valore letterario degli scritti dei viaggiatori poco noti.

Il XVIII secolo è certamente il periodo più interessante poichè c'è stato un grande cambiamento per quanto riguarda l'immagine o la percezione che i viaggiatori avevano dell'Italia. Ci sono tuttavia ancora molti punti oscuri, come l'interrelazione tra il diverso punto di vista che avevano gli inglesi, francesi ed i tedeschi e il rapporto probabilmente esistente tra la visione che avevano gli intellettuali stranieri e il concetto dell'Italia che si andava formando tra gli italiani. Due libri ci insegnano, inoltre, che questo tipo di studio sull'immagine di un paese deve superare, però, una critica che la interpreta in maniera arbitraria, stereotipa e soggettiva nelle citazioni dei testi originali.